

## カロン・テアマ：運ばれてきた将たちの遺体(E. Supp.783)<sup>1</sup>

吉武 純夫

テーバイに攻め入った七将の遺体が、クレオンの布告によって野晒しにされていた。アルゴス人自身の力では奪還できないその遺体を、アテナイ王テセウスが取り返してきて、アドラストス王と母たちに引渡すまでを描いた劇が、エウリピデス『ヒケティデス』である。その遺体がこの劇の主人公であるといっても過言ではない。冒頭に遺体の奪還を求める嘆願があり、テセウス軍も重い腰をあげてこれを目指す。劇半ばで舞台上に運び込まれた遺体は、母たち(コロス)とアドラストスの感情をあおる。彼女たちは遺体の到来に嘆きを強め、アドラストスは遺体を目の前にして自らの責任を痛恨する。テセウスは、遺体を見ることで彼らの *tolmēmata*(大胆な活躍)を見知ったという。彼はまた、遺体を目の当たりにしたら母たちは息絶えてしまうだろうと言い、Euadne は投身して焼かれる夫の遺体との合体を目指す。遺体が火に引渡されることで、母たちは息子らとの別れを実感する。この劇は、遺体によって掻き立てられる情によって押し進められてゆく。

いよいよ遺体がやって来る時、母たちが遺体を見ることの辛さと願わしさの両方を交えた複雑な心情を抱いていることは容易に理解できるが、彼女らは遺体の眺めを「カロスなるテアマ」(*kalon theāma*)と表現する<sup>2</sup>。すでに腐敗して見苦しい状態であると想像される将たちの遺体の光景を、「美しい」、「立派な」と訳されることの多い「カロス」という言葉で形容するのは、どういうことなのだろうか。この意味を考えることを通して、舞台に運び込まれた遺体をめぐって展開される葛藤を説明するのが本論の目的である。

### 1 カロン・テアマ

遺体の奪還を請われたテセウスは自軍を率いてテーバイに乗り込んで勝利する。アルゴス兵の遺体をすべて取り返して現地に埋葬したが、将たちの遺体だけは、アテナイで待つ母たちとアドラストスのもとにそのまま持ち帰る。まもなく遺体が到着するという状況の中で歌われる第三スタシモンの中に、母たちの次の言葉がある。

[Xo.] τὰ μὲν εὔ, τὰ δὲ δυστυχῆ·

πόλει μὲν εὐδοξία

καὶ στρατηλάταις δορὸς

780

διπλάζεται τιμά·

ἐμοὶ δὲ παίδων μὲν εἰσιδεῖν μέλη

πικρόν, καλὸν θέαμα δ' εἴπερ ὄψομαι,

τὰν ἄελπτον ἡμέραν

ἰδοῦσα, πάντων μέγιστον ἄλγος.

(Diggle, 1981)

これはよきことでもあり、不幸な廻り合わせでもある。

国にとっては栄光が、

軍を導く将らには

名誉が積み重ねられる。

しかし私にしてみれば、子らの身体を直視するのは

辛いことだ。カロスなる観物を見るのであるとしても<sup>3</sup>,

—それも殆ど望み得なかったこの日を見て(迎えて)のことなのだが—,

それは最大の苦しみだ。

(778-85行, 拙訳)

この *strophe* が全体として、息子らの遺体を迎えることについての、哀しみと喜びが混じりあった複雑な心境を歌ったものであることは容易にわかるが、783行で、テアマがカロスの語で形容されているのはどういうことなのか？この形容詞は、何らかのすぐれた状態を表すことは間違いないが、その意味するところはさほど単純ではない。ホメロスにおける具象的用法の優勢、古典期における内面的意味の重視など、多様な意味のなかから、それぞれのテキストにおける正しい意味を捉えるためには、この語がどのような対象をどんなコンテキストで形容しているかに留意することが肝要である。コロスたちはこの語によって、何がどうすぐれていると言おうとしているのだろうか？

このような問題について、従来においては、説明や議論はほとんどなされていないというのが実情のようである。Collard のコメントリは、この句がアリストパネスによってパロディされるほどに(『鳥』1716)、エウリピデスの言葉としてよく知られていた、と言うだけで、カロスという語にもテアマという語にも解説は加えていない。ただ僅かに、Vernant が、ホメロスにおける「美しき死 (*belle mort*)」を論じるなかでこの箇所と言及している。彼は私たちのテキストの

カロン・テアマを、ヘクトルの戦死遺体が *eidōs agēton*(Il.22.370) とされたりアキレウスの戦死遺体(の膚)が *chroa kālon*(Od.24.44)とされたりすることと関連付けている<sup>4</sup>。『イリアス』における 22.73 の「パンタ・カラ」を「美しい死」(*belle mort*) に繋げようとする彼の論説は、3 節での議論に大きなヒントを与えるものであるが、私たちのパッセージについての彼の言及はごく簡単なもので、この句にこめられた意味の複合性についてはなんら説明を与えていない。よって、カロン・テアマの意味を私たちは殆どいちから考えてゆかなくてはならない。

しかし 782-83 行に対する従来の翻訳を見てみると、いくつかの異なる解釈がなされているのが分かる。それらを検討しながら、問題を整理してみよう。

D.Kovacs 訳 (Loeb1998) :

But for us to look on the bodies of our sons is painful (though it will be a fair sight if we ever behold it), ...

橋本隆夫訳(岩波書店 1991):

だが私には、わが子の無残な姿を見るのは、一思いもかけない今日の日を拝して、いざ、その姿を目にするとすれば、心に望んでいたことではありますが一、やはりつらいもの。

中山恒夫訳(筑摩書房 1965):

わが子の遺体を見ようとは つらいけれども うれしい観物一 ...

E.P.Colegidge 訳(New York 1938):

For me it is bitter to see the limbs of my dead sons, and yet a welcome sight, if I shall see it, ...

F.W.Jones 訳(Chicago 1958):

For me, to look upon my children's bodies-- a bitter, lovely sight, if I ever see it...

H.Gregoire 訳(Bude 1923):

Pour moi, revoir le corps de mes enfants est un spectacle amer et beau, ...

A.S.Way 訳(Loeb 1912):

But to see my son's limbs! -sight bitter for me, Yet proud, ...

考えるべき第一の問題点は、Kovacs がカロン・テアマを *fair sight* と訳しており、要するに「姿が美しい」という類の視覚的な快を表すもののように解していることだ。損傷して直視できないようなものであるはずの遺体の光景を、見た者に快を与えるものと見做しているとしたら奇妙なことである<sup>5</sup>。カロスが意

味しているのは、視覚的な快とは違うのではないかと疑われる<sup>6</sup>。しかしまた、そのように訳されても仕方がないような語を原典が使っているという事実も無視するべきではない。プラトンは、カロスなるものは、「もっとも鋭敏な感覚である視覚」に訴えるときにもっとも鋭く感得され、エロスを掻き立てるものだ、と言っている<sup>7</sup>。そしてプラトンは、そのエロスとは狂気的一种だと言って憚らない<sup>8</sup>。これが一字一句正しいと考える必要はないが、カロスという概念の本質的な一面を表わしていると思われる。というのは、この光景を目にした母たちもアドラストスも、狂おしい嘆きにとらわれてゆくからである。これに着目するならば、私たちの783のテキストも、「美しい姿」ではないとしても、何かこれに近いセンセーショナルなものがあることを表しているのに違いないと思われる。

第二に挙げられる問題点は、橋本、中山、Coleridge、Jones 訳において、あたかも、息子のすがたを目にすることの純然たる願わしさ・喜びが、遺体の惨状とは完全に独立したものとしてあり、カロスの部分がこれを率直に表現したものであるかのように訳しているということである。息子に再会すること自体は確かに願わしいことだろう。しかし、カロスとされているのは、息子という人格などではなく、損傷などを含めた遺体の「光景」である。それならば、これを単純に、願わしいもの、愛しいものと屈託なく形容することははなはだ奇妙である<sup>9</sup>。そもそも、カロスという語は *philos* という形容詞とは違い、「誰かにとって好ましい、愛しい」ということを表すものではない。与格語などを補い「～に相応しい」という意味で他のものとの関係性を表すことはあるが<sup>10</sup>、そうではない場合は通常、カロスは絶対的な評価を表すものである<sup>11</sup>。782には *emoi* という与格語があるが、これは、カロン・テアマとはコンマによって切り離された、別の構文の中で、*pikron* (辛い) という形容詞に結びついているのである。したがって、カロン・テアマを、「(私にとっての) 好ましい光景」という意味で解するのは妥当ではない。勿論、辛くとも遺体を見たいという心情は確かにあり、それは息子が恋しいからであるだろう。しかし、それだからといってカロスという言葉が、息子に再会することの甘美さに由来する遺体の吸引力を表すものだということにはならない。

第三に挙げられる疑問点は、そもそもカロスと形容されているテアマがどういう意味で使われているのかということだ<sup>12</sup>。Gregoire による以外の訳は、みなテアマに *sight* ないし観物などの訳語を与え、「目に見えるもの」を意味するものとしている<sup>13</sup>。カロスという語は、その対象が「目に見えるもの」である場合

は、通常、視覚的に捉えられる何らかの長所、しかも感動を呼ぶような長所があることを示すものである。ところが Gregoire は、revoir le corps de mes enfants を主語として、これに *be* 動詞で *un spectacle beau* という補語を結び付けている。すなわち、カロスなのは「子らの遺体に再会する」という行為のことであるのか、目に見えているもののことであるのか、あいまいな訳し方をしている。ギリシア語において、カロスが行為を形容する場合は、行為の倫理的な好ましくないしは妥当性を表すというのが通例である。それゆえ、原文においてカロスが直接に形容しているのは前の行の *eisidein* という不定詞ではなくて、あくまでもテアマであることに注意しなくてはならない。ここでのカロスは、目に見えるものが感銘を与えるさまを表しているのであり、行為の妥当性を表しているのではない。

考えるべき第四の点は、Way がカロスの部分を *proud* と訳し切っていることだ。カロスの語が遺体の誇るべき立派な様子を表している、という考え方は正しいであろう。遺体のその光景が、称えられるべきものとしての死、「カロス・タナトス」<sup>14</sup>を髣髴とさせるものであることが、カロン・テアマという表現の中に含意されていると考えられるからである。しかし、損傷した遺体の光景が(プラトンの言葉を借りるならば)「見る者の心にエロスを掻き立てる」ような事態が、その「立派さ」という側面だけに収束すると解するのは妥当ではないだろう<sup>15</sup>。

以上の簡単な考察から、次のような推測が導かれる。あるものの眺めがカロスであるということは、それが何かすぐれたものを視覚的に映し出していて、人の心を強く動かすような絵をなしているということではないか。ここで、「何かすぐれたもの」というのは、外形的なものであるかもしれないし、直接には目に見えない内面的なもの、たとえば、目に見えている対象の性質・資質・精神・態度・行動履歴などであるかもしれない。また、「すぐれている」というのは、描写力・再現力がすぐれているという事かもしれないし<sup>16</sup>、そこに見えているものの内容が感覚的あるいは倫理的あるいは機能的にすぐれているという事かもしれない。それはエロスあるいは憧れを掻き立てることもあるし、見るものを驚嘆させることもある。

『ヒケティデス』783 においては、テアマは、それが息子の光景だからなのではなく、まもなく目の前に現れるありさま、すなわち、戦死者としての損傷、その生々しさ、複数の遺体という圧倒感、それに、おそらく軍隊式葬列の壮大さ<sup>17</sup>などの総体のゆえにカロスだとされているのだと考えられる。そうだとす

れば、このドラマにおいて戦死遺体の光景がカロスと形容されるのは、それが、将たちの凄まじい戦いぶりを髣髴とさせる見事な絵をなすものであり、それがさまざまに見る者の心を揺さぶるようなものであることを先取りしているのだと考えられる。

ここで重要なのが、次の二点である。その一つは、このドラマの中では、戦死遺体としての生々しいありさまが、母たちの愛惜やアドラストスの痛恨を激しく揺き立てるものになっているということだ。劇がこの点をめぐってどう展開されているかを、第2節で検討する。もう一つの点は、将たちの傷ついた遺体の光景をカロスと形容することは、切り苛まれた戦死者の光景を「パンタ・カラ」という言葉で形容している『イリアス』22.73を思い起こさせるものであり、戦死全般をカロスという言葉で称える伝統を呼び起こしているということである。その含意は、第3節で検討される。第4節では、遺体の光景がもたらす波紋を描くことによって、この劇が戦争について提示しているメッセージを明らかにする。

## 2 見まほしき遺体

遺体の光景をカロン・テアマと形容することの意味を考えると、参考になるのは、プラトン『国家』439e-440aに描かれている、Leontiosが刑死遺体の「カロン・テアマ」に魅了されたエピソードである。この男はペイライエウスからアテナイへ帰る途中、野晒しにされている罪人の刑死遺体をたまたま眼にする。死体に気づいたとき、「嫌悪の気持ちが働いて、身を翻そうとした(*dyscherainoi kai apotrepoi heauton*)」(439e)が<sup>18</sup>、好奇心から、よく見てみたいという欲求に駆られる。止そうとする思いと激しく葛藤しながらも、欲求に負けてしまう。そのとき、彼は自分自身の目に向かって「このカロン・テアマを存分に味わうが良い」(*emplēsthēte tou kalou theāmatos*)と叫んで死体を見る。少なくとも普通の意味では「美しい」とか「魅力的」と言えるような光景ではなく、かえって目を背けたくなるような光景<sup>19</sup>がカロスだとされているということが、このエピソードと、『ヒケティデス』783との重要な共通点である。というのは、アルゴスの将たちの遺体は、テセウスによって奪還されるまで、傷ついたまま数日間にわたって野晒しにされており、腐敗や鳥獣によっても少なからず損傷していたはずだからである<sup>20</sup>。

Leontios エピソードの場合、罪人の刑死遺体のすがたはどのような意味で「カロ

スなる光景」といわれているのだろうか。Leontios の心の目にどう見えているかはさておき、普通にはとてもカロスと言えそうにないものを、あたかも客観的にカロスなるものであるかのように言う、という皮肉があるものと考えられる<sup>21</sup>。その皮肉が成り立つのは、その光景をカロスと形容することが妥当となる状況と似た状況がそこにあるからである。罪人の刑死の結果であるその光景は、視覚的な快を与えるものでも、立派なものでもなく、何の美点を表しているのでもないだろう。しかし、その光景が Leontios の心に狂おしいほどの欲求を掻き立てているという事実だけは、正真正銘のカロスなるものがそれを見る者にもたらすであろう状況と同じである。この事実は重視されるべきである。なぜならば、その少し前の箇所(402d)で、「最もカロスなるもの(*kalliston*)は最も強くエロスを引起す(*erasmiōtaton*)」ということの確認が行われているからである。だから、ここでのカロン・テアマとは、自己抑制が効かぬほどの激しい欲求をもたらす光景のことだといえよう<sup>22</sup>。勿論カロン・テアマという例がみな狂おしいほどの欲求を掻き立てる外貌をいうわけではないとしても、光景がカロスだということは、そういうポテンシャルのある様子として理解されるものなのである。

将たちの戦死遺体としての光景は、まず、この意味において、カロン・テアマになっているといえる。なぜならば、狂おしいほどの欲求を母たちにもたらすものとして示されているからである。すなわち、第三スタシモンが終わると同時に遺体が舞台上へと持ち込まれるが、母たちは遠巻きにしながらその光景を見るやいなや<sup>23</sup>、「一緒に死んでハデスへ下りたい(*μελέα/ πῶς ἂν ὀλοίμην σὺν τοῖσδε τέκνοις/ κοινὸν ἐς Ἄϊδην καταβάσῃ;*)」(795-97)と嘆くのである<sup>24</sup>。これはまさに、一緒になりたいという狂おしい欲求なのであって、カロスなるものが掻き立てるというエロスが、分かりやすい形で現れていると言えよう。勿論、母親にとって死んだ息子というものは、いかなる死に方をしたのであったとしても、抱き寄せたい対象であり、一緒に死にたいと思うとしても不思議ではない。しかし、彼女たちが垣間見た光景は、意味もなく死んだ息子らのすがたではない。かの光景には、息子たちがいかなる死を遂げたかということが如実に反映しているのであり、それも相俟って母たちの心が掻き乱されたのである。

遺体の眺めは、彼女らを惹きつけて止まない。しかし、遺体はスケアーネーに置かれるのであり、オルケストラにいる彼女らには、よく見ることが許されない。ここから母たちとアドラストスの嘆きの交唱(第一コンモス：794-836)が続くが、注目されるのは、アドラストスの動きである。母たちは息子らへの哀惜

の念を、アドラストスは愚かな戦争をして自国の男子たちを死なせたことの悔恨を、それぞれ痛切に訴える。劇前半では、彼らの嘆願が一旦拒絶されたときの反応(253-85)として、アドラストスには自己統制力と潔い諦めが見られたのに対して、母たちのほうが感傷的で強引であるように見えた。しかし今に至っては、アドラストスが母たちよりも激しく嘆くのである。母たちは、コンモスのはじめに、一度死欲求を吐露するきりであるが、アドラストスはコンモスが進むにつれて感情を昂ぶらせてゆき、コンモスの後半において二度も死欲求を口にするようになる。「カドモス人らの戦列が私を砂塵の中に殺して欲しかった(εἶθε με Καδμείων ἕναρον σίχες ἐν κονίαισιν.)(821)。「大地は私を飲み下してくれないだろうか、大風が引き裂き、ゼウスの火炎が頭に落ちてくれないだろうか(κατά με πέδον γᾶς ἔλοι/ διὰ δὲ θύελλα σπάσαι/ πυρός τε φλογμὸς ὁ Διὸς ἐν κάραι πέσοι.)(829-31)。彼は、いまや母たちをさしおいて、ほしいままな嘆きに浸っている。このことは、将たちの遺体が、母たちからは遠ざけられている分だけ、アドラストスのすぐそばに置かれているという事実と対応している。彼自身の「運び入れよ、不運な男たちの血にまみれた身体を」(811-12)という言葉が示すのも、彼が、遺体の生々しいすがたを目の前にして、嘆きを昂めてゆくということである<sup>25</sup>。彼の心の中にエロスを掻き立てたというのは当たらないだろうが、アドラストスの心を昂ぶらせているのは、その生々しい傷跡によって彼らの死を映し出しているかの光景なのであり、それはやはり、カロン・テアマと呼ばれる相応しいものなのである。

944に至ると、テセウスは自ら、もし母たちが息子たちの変わり果てた様子を「見る」ならば、彼女たちは死んでしまうかもしれない、と予想する。しかし観衆はそれに先んじて、かのカロン・テアマがどんなに人の心を掻きぶる力を持つものであるのかを、アドラストスの振舞いの中に見出すように仕組まれているのである。また、第五スタシモンで展開されるEuadneの焼身自殺のエピソードも、カロン・テアマによって掻き立てられるエロスと悲痛<sup>26</sup>が、無制約に放置されたならば途方もない結果を生むことになるということを示すものだということができる<sup>27</sup>。

こうしてみると、最初にテセウスが遺体を母たちからよく見えないところに置いたことも、すでに彼女らの嘆きに対する牽制なのであったということが分かる。さらに、母たちは遺体のすがたを「見る」ことを禁じられたまま(944)、彼らを火葬場へと送り出さなくてはならない。テセウスは、また、アドラストスに対しても嘆きを牽制している。すなわち、戦死者を称えるという知的な課

題を彼に与えることによって、彼を感傷的な嘆きのモードから、一気に理性的な演説のモードに移行させる<sup>28</sup>。為政者であるテセウスがこのような措置を講じたのには、尤もな理由があった。戦死者の遺族や同胞が自己破壊的な欲求に走ったり極度に取り乱したりするということは、政治的に望ましくないことだからである。というのも、戦死という殆ど避けられない社会現象と折り合いを付けて社会秩序を維持してゆくことが必要だからである。現実のアテナイでは、年に一度だけ戦死者の骨を集めて象徴化・抽象化した形で戦死者葬礼が行われていたが、そこにも、生々しい遺体を排除するという同じ精神を見ることができる<sup>29</sup>。

将たちの骨灰が運ばれてくる第二コンモス(1114-64)は、その直前までのシーン、すなわち、Euadne が誇らしげに炎の中へ投身自殺し、Iphis がそれを止させることも叶わず絶望のうちに退場するという、極度の高揚感と切実な死欲求で満ちたシーンと、著しい対照をなしている。ここにおいては、もはや、張り詰めた思いはほとんど聞こえてこない。たしかに、将たちの遺児らはコンモス中間部(str.2, ant.2)で復讐意思を口にするが、それはコロスを同調させることもなく(*halis*:1147, 1148)、コンモス後部にも続かない。それはもともと子供の意思であり、そのインパクトは弱い。ここで強調されているのは母たちの脱力感(*amenēs, ou rōmē*: 1116-17)と喪失感である(*bebāsin*:1138, 1139; *ebās*:1162)。彼女らの悲痛は続いているが、抑えがたい情念は立ち消えている。1160 で彼女らは骨灰を受け取っても、テセウスが 944 において予想していたような破滅的な気分を口にすることはしない(1160)。劇の終りで彼女らが、アテナイとの同盟関係を誓うようアドラストスに誘いかけ、テセウスに感謝して立ち去ることは、彼女らが悲痛から回復しつつあることを示唆する。

生の遺体が到着しても、母たちは、それを見て取り乱すことがないようにと、それに近づくことを許されなかった(947)。彼女たちが狂おしい感情から解放されたのは、遺体が骨灰となって運ばれてきたときであった。遺体が骨灰になるということは、息子らの生前のすがたと戦闘の痕跡の一切が滅却するということである。つまり、かのカロン・テアマを滅却することによって、狂おしいが沈静化されたということになるのである。

このように、783 のカロン・テアマとは、将たちが戦死したことを生々しく映し出して、見る者に狂おしい心情を掻き立てるところの、遺体のすがたのことだということができる。

### 3 称えられるべき戦死

しかし同時に、カロン・テアマはもうひとつ別の意味を持っている。戦死遺体を映し出している光景がカロスと形容されるという事態が、『イリアス』22.73の「パンタカラ」という言葉を思い起こさせるからである。そこでは、アキレウスを迎え撃とうとするヘクトルに、プリアモスが城壁内に戻れと語りかける。もしもヘクトルが敗れたなら、老人である自分がどんなに惨めに殺されることになるかを語った後、若者と老人の死に様を比較して次のように言う。

νέφ' δέ τε πάντ' ἐπέοικεν  
 ἄρηι κταμένῳ δεδαυγμένῳ ὄξει χαλκῶ  
 κείσθαι· πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ' ὅττι φανήη· 73  
 ἀλλ' ὅτε δὴ πολλόν τε κάρη πολλόν τε γένειον  
 αἰδῶ τ' αἰσχύνωσι κύνες κταμένοιο γέροντος, 75  
 τοῦτο δὲ οἴκτιστον πέλεται δειλοῖσι βροτοῖσιν.

鋭利の刃に撃たれ戦場に倒れて横たわるにしても、それが若者ならば万事立派に見える(*pant' epeoike*)、たとえ死んでいても、目に映るものが何もかも美しいのだ(*panta kāla*)。だが討たれた年寄りの白髪頭や白髯や隠し所を犬どもが辱しめる時、憐れな人間どもにとってこれより悲惨なことはない。

(22 卷 71-76 行、松平千秋訳)

73 では、*panta*(全てのもの)が主語となり、*be* 動詞は省略されているが、*kāla* という補語に繋がれている。*panta* は *hotti phanēēi*(目に映るであろうところの)の先行詞となっている。*thanonti* は、「死んだ者」を表すアオリスト分詞の与格である。問題は *kāla* をどう解するかである。カロスは、ホメロスにおいては与格と結びついて、「～に相応しい、似つかわしい」という意味を持ちうるが、この文脈においては、その意味で解することは難しい<sup>30</sup>。この与格は、「利害関係」<sup>31</sup>を緩く表すものと解し、「そのことは、死んだ者の利害と無関係なことではない」という意味を見るのが妥当であろう。すると、73 の意味は次のようになる。「(鋭い刀で切り苛まれて若者が戦死した場合は)目に見えるであろうものはすべてカロスである。それは彼にとって損なことではない。たとえ彼が死んで

しまっているにしてもだ。」カロスの意味は明瞭ではないにしても、その光景が何らかの意味でよき光景だと言おうとしていることはまちがいないだろう。

『イリアス』のこの一節を念頭において、*Tyrtaios* は「カロス・タナトス」という概念を規定した。ここでもカロスという語の意味は単純ではないが、ともかくそれは、「祖国のために果敢に戦いながら前線上で倒れて死ぬこと」という、視覚的に捉えた死を称えたものである。『イリアス』においては、何がカロスなのかがはっきりしなかったが<sup>32</sup>、*Tyrtaios* においては、明確に戦死そのものがカロスと形容される対象となった<sup>33</sup>。その後には、いかに戦ったかを問うことなしに、戦の場での死はすべてカロスなるものとして称えられる、という流れも生じた(Alc., 400.1; A.Th., 1011)。『ヒケティデス』の母たちが戦死遺体をカロスなる観物と表現することは、これら一切の含意を呼び起こすことである。

このカロス・タナトスの伝統においては、今述べたように、「戦場で死ぬということ」がそれだけで称えられるべきことと見做される場合もあったし、葬礼演説の伝統においては、それは常態化した。だから、状況によっては、「戦闘の場で死んだと報告すること」だけでも、その死の称賛を含意するものとなりうるのである。そうであれば、兵士が戦闘で死んだということを視覚的に示して見せるだけでも、その死を立派なものとして評価することを意味するだろう。

テセウスは 844 で、彼自身(ないしは、遺体を取り返してきたアテナイの若い兵士たち)<sup>34</sup>は、将たちの *tolmēmata*(大胆な振舞い)を「見た」と言っているが、それは、戦死遺体の様子を目にすることがとりもなおさず彼らの果敢な戦いぶりを感得することを意味する、とテセウスが認めているということを表している。後述するように、テセウスは彼らの大胆さを率直に称えようとはしないのだが、ギリシアの通念では、大胆さは男子の称えられるべき徳に数えられていた<sup>35</sup>。将たちの遺体の生々しい光景であるカロン・テアマは、彼らの武勇の、名ばかりではなく実体ある証なのである。783 のコンテキストにおけるカロン・テアマとは、カロス・タナトスを髣髴とさせるような遺体の光景のことでもある。

そうであるとすれば、783 のカロン・テアマという言葉には、母たちの意図があるか否かに関わりなく、息子らの死についての母たちの誇りを感じさせる響きもあるといえる。

ところで、このような伝統に照らし合わせると、テセウスは遺体をどのように提示し、彼らの死をどのように報告しているかということが重要性を帯びてくる。テセウスは、彼らの戦死を称えることに関しては積極的ではない。勿論

テセウスは、彼らが *eupsychia* において卓越していたこと、彼らの *tolmēmata* が強烈なものだったことは認めている。また、確かに、彼は「勇戦の証」である遺体をエレウシスまで持ってきたし、遠巻きに見せる限りにおいて「カロスなる光景」に物言わせたと言える。しかし、彼は遺体を母たちから離れたところに配置したし、それだけではなく、アドラストス以外の誰をも遺体には近づかせない。少なくとも、彼はかのカロン・テアマを勇戦の証として積極的に活用しようとしてはいない。それだけではない。彼はアドラストスに将たちへの賛辞を語らせるとき、彼らの戦いぶりと死について語ることを一切禁じるのである(846-48, 853)。その理由を考えると注意が必要である。

テセウスが自身で語っている理由は、戦闘報告が信用できないから、ということである。

だが、戦場で誰が誰と戦ったかとか、  
誰の槍を受けて負傷したかというようなことは、  
聞くとは思わない。このようなことをすれば失笑を買うだけであろう。  
目の前を槍のひっきりなしに飛び交う戦場にあって、  
誰が勇ましい者であったかなどと、見てきたように伝えると言っても、 850  
これを語ったりする者、これを聞き伝える者の、  
言葉などは空虚なものである。  
このようなことを訊ねるつもりもなければ、  
このようなことをあえて語る者を信じることもできない。  
すなわち、敵の軍勢と向い合った時に、 855  
自分の身を守るに必要なことだけでも目にするのできる者はほとんどいない  
のだ。 (846-56行、橋本隆夫訳)

これは戦死者葬礼演説の一般的あり方についての信条告白でもあるだろうし、さらに、プラトン『メネクセノス』において指摘されているようなアテナイの葬礼演説全般に認められる欺瞞性<sup>36</sup>への批判でもあるかもしれない<sup>37</sup>。これらの懸念があって、アドラストスの称賛演説の内容に制約を加えたのだとしてもおかしいことはない。しかし、もっと重大な理由となりうるものが劇の前半において示されている。つまり、彼はアドラストスがテーバイに仕掛けた戦いについて、徹底的に否定的な態度をとっていた。アドラストスが嘆願してきたとき、テセウスは彼に問い質して、かの戦いが神意に反したものであり、彼らが

発揮した勇猛心は思慮分別を欠いたものだったことを早々と確認していた(155-61)。野心に燃えて彼をそそのかした若者たちへの弾劾も忘れない(232-34)。テセウスが自ら救援軍を率いて出発するときにも、戦には正義と神の同意が必要であることを強調し、それを欠いた戦いにおいては、アレテー(勇敢さ)さえも無意味だと言っている。

ἐν δεῖ μόνον μοι· τοὺς θεοὺς ἔχειν ὅσοι  
δίκην σέβονται· ταῦτα γὰρ ξυνόνθ' ὁμοῦ  
νίκην δίδωσιν· ἀρετὴ δ' οὐδὲν φέρεῖ  
βροτοῖσιν ἢν μὴ τὸν θεὸν χρήζοντ' ἔχημ.

595

私に必要なものはただ一つだ。正義を尊ぶ神々を  
味方に持つことだ。というのは、それらが同時に揃っていれば、  
勝利が与えられる。だが賛同する神を味方につけるのでなくては、  
アレテー(勇敢さ)は人々に何もかもたらさない。(594-97行、拙訳)

だから、彼が、アルゴスの将たちの武勇や死が称えられることを苦々しく思うとしても、なんら不思議ではない。このことは、彼が将たちへの賛辞に制約をもうけた理由として言明されているわけではない。けれども、かの牽制が、彼のこの信念によく調和するものだとすることは重要である。

将たちの戦死が称賛を得ることは、遠くからの眺めが許された限りにおいてのみ、黙認された。遠くに置かれた遺体の光景自体が、物語ることを許されたのみである。言葉の次元においては、彼らがいかに戦い、いかに死んだかを表すことは僅かにも許されない。彼らの武勇が言葉に還元されることのないまま、それを証する唯一のものであるカロン・テアマは、火葬に付され、滅却されることとなる。彼らの戦死への評価はそういう形で制限されている。このように、戦死の評価という面でも、カロン・テアマがもたらしうる効果は大きく牽制されているのである。

将たちの戦死の名譽を無視するということは、義を欠いた戦闘を仕掛けたからだとはいえ、アテナイの葬礼演説の精神からすると非常に酷なる仕打ちである<sup>38</sup>。ただし、テセウスは彼らに対して冷徹なわけではない。彼らの勇戦を称えることは牽制しつつも、彼らの気骨を生み出したものが何なのかを語るようにとアドラストスを促す。アドラストスはこれに応じて、彼らの秀でた性格や

才能を語る。テセウスは彼らに対する敬意も忘れなかった。それは、テセウスが彼らの遺体に自ら手当てをしたという報告(764-66)に示されていた。

#### 4 戦争批判

戦争批判は、この劇の顕著なメッセージの一つであるが<sup>39</sup>、注目すべきことは、戦死者の遺体が、この劇の何箇所かで、戦争の愚を警告する動機を作っていることである。まず、テーバイの使者がテセウスに向かって、アテナイが軍を派遣することの不当性を主張する中で、戦争は狂気の行為である(*dorimanēs*)であると断じ、なおかつ、それは「戦死の光景」を人々に見せることによって抑制することができる、ということを描いている。「もし投票の際に、死が目の前に見えているならば、ヘラスが槍に心狂わせて滅ぶようなこともないであろうのに。」(484-85)これは政治的論争というコンテキストを超えて、普遍性を持った真理であろう<sup>40</sup>。いっぽうアドラストスは 949-52 で、744-49 に次ぐ 2 回目の戦争批判を語る。「ああ、哀れな人間たちよ、なぜお前たちは槍を取り互いに殺戮を重ねあうのか。止めなさい。そんな苦しみは止めにして平和のうちに町を守りなさい。」重要なのは、この言葉が語られるタイミングである。これは、将たちの遺体がいよいよ火葬の場へと運び出される時に語られる最後の言葉であると共に、「変わり果てた遺体」を目にした場合に母たちがいかに酷い苦しみ(944-45)を味わうかを想像した結果として発せられた言葉である。母たちはあからさまに戦争批判を口にすることはないが、劇の最初に、失われた息子の遺体を請い求める粘り強い嘆願者として登場したときから、厭戦の思いを象徴するともいえる存在である。アドラストスはこの箇所で、彼女らが終始募らせてきた思いを代弁しているのであるとも言える。この劇は、戦死遺体のセンセーショナルな光景がもたらす効果をよく意識して、戦争が確実に厭わしいものだということを力強く伝えていることは確かである。

しかし、一見自然であり尤もなものに思われる戦争批判も、この劇では単純に是とされているわけではない。厭戦観に水をさす要素もある。まず、嘆願の場面である。アドラストスが仕掛けた戦争を非難し、それにはかかわるまいと決めていたテセウスに向かって、アイトラは、「不正を正すための戦いは請け負うべきだ」と説得して、テセウスを戦争に向かわせる。テセウスも、一旦戦うことを義と判断すれば、もはや躊躇いは見せず戦争に出発する。そしてアングロスの報告(650-730)は、テセウスらの戦いを栄えあるものとして描いている。

もつとも、その最後に、遺体を取り返すという本来の目的以上のことは何もせず引き上げたというテセウスの抑制的態度をも忘れずに描いている(723-25)。また、この劇は、テセウスが戦闘を交える前に武力によらぬ解決の可能性を探ろうとする様子を何度も描いている(347, 358, 385-89, 558-90)。要するに、テセウスは、594-97で自ら語っているように、神の支持と義の有無によって戦争の是非を冷静に判断することを旨としているのである。戦争はしないつもりでいても兵を出さねばならない時はあり、そんなときに情に流されて判断してはならない、ということである。この姿勢は、嘆願されたときから打ち出されておられ、劇中を通して動じることがない。この原則において彼は毅然としており、それは、義を欠いた戦死者についてはアレテーさえも認めない、というほどであった。母たちやアドラストスが生々しい遺体を目にして感情に溺れるということを許さない、ということも同じ精神に由来する措置であった。

こうしてみると、949-52で語られたアドラストスの戦争批判もまた、多分に情緒的なものでもあった。この劇は、反戦論を絶対的なものとせず、相対的な目で捉えるように促しているように思われる。終盤で登場するアテナ女神は、それまでに発せられた反戦論を意に介さぬかのごとくに、戦争の是非について冷静で現実的なメッセージを語る。テセウスがアドラストスに、このたびの恩義を忘れぬよう求めて将たちの遺骨を渡そうとすると、女神は、将来にわたって裏切らないという誓約を取らずに引渡してはならないと警告する。これは、外交関係においては、現在の融和的な雰囲気に関わられて相手に気を許すようなことがあってはならない、いつか戦い合うこともありうるという現実を直視する必要がある、ということに他ならない。戦争は避けられない、備えなくてはならない、という現実的な知恵は、戦争が悲惨で愚かしいという感懐に関わされずに保持すべきものである。情に流されて判断してはならないというテセウスの精神もこれとほぼ同じだといえよう。この劇は、戦争批判を最大のメッセージとはしていない。エウリピデスがこれをアテナ女神の視野の外に置いたことは、戦争忌避があまり現実的な課題ではないことを示唆したのであるかもしれない<sup>41</sup>。

第四スタシモンで言葉少なに表明された孤児たちの復讐意思についても考えてみよう。孤児たちの訴えは弱く、このスタシモンの中で立ち消えになるかに見える。それは厭戦ムードに圧倒されたかのようなでもある。だから、アテナ女神が終盤のセリフで、孤児たちによる復讐の実現を予言することは意外に思われる。しかし、アテナの予言は、復讐を是とも非ともしていないことに注意す

るべきである。復讐はアルゴス人たちの問題であるが、アテナが語りかけているのはアテナイ王テセウスなのである。だから、女神がここでアルゴス人のとるべき道をとにかくいう筋合いもないのだ。エピゴノイの復讐は神話の中の既成事実なのであり、彼女はそれを予告しているに過ぎない<sup>42</sup>。ここでこの神話が予告されるということに意味が見出せるとすれば、それは、「戦争はいつまでたってもなくなる」という厳しい現実が示されているということであろう。

## 5 まとめ

戦死遺体の光景がカロスと形容されるのは、それが息子の光景だからではなく、目に見える戦死者としてのありさまゆえのことである。783のカロン・テアマとは、将たちの凄まじい戦いぶりを髣髴とさせる見事な絵をなし、見る者の心を揺さぶるような、遺体の光景を表したものである。母たちもアドラストスも、それを見ることで激しい思いを掻き立てられた。火葬によりそれが消滅すると共に、母たちの嘆きも沈静化した。

カロン・テアマは、彼らの死がカロス・タナトス(称えられるべき戦死)であったことを証する光景でもある。カロス・タナトスの伝統の中では、その光景を人の目に晒すことが、彼らの死にざまを語ることと同様に、彼らの死を称えることを意味する。しかし、将たちの仕掛けた戦争は神の同意と義を欠いたものであったために、テセウスは彼らの死を称えることを拒む。彼らの死に様を語らないまま彼らの遺体を火葬に付すことは、カロス・タナトスの証をなきものにしてしまうことでもある。ただし、テセウスは決して彼らに冷酷なわけではない。

戦争批判は、この劇の顕著なメッセージの一つであるが、カロン・テアマに対する反応として噴出した多分に情緒的なものとして位置づけられる。この劇は、そういう反戦論を相対的な目で捉えるように促している。戦争の是非を冷静に判断することを旨とするテセウスは、戦争をすべきか否かを判断するときには、情に流されてはならないという立場をとる。彼の精神は、アテナ女神と同様、感情的な反戦論を超越したところにある。

以上に論じてきたように、この劇は、戦死遺体の生々しい光景(カロン・テアマ)に影響されて生じた、母やアドラストスの思いと、テセウスの理性主義との葛藤を描いた物語である。

## Bibliography

- Allen(2000): D.S.Allen, 'Envisaging the body of the condemned : the power of Platonic symbols', *Classical Philology* 95, 133-50.
- Autenrieth(1984): G.Autenrieth, *Homeric Dictionary* (originally German).
- Burian(1995) : P.Burian, 'Logos and pathos: the politics of the *Suppliant Women*' in P.Burian (ed.), *Directions in Euripidean Criticism: A Collection of Essays* (Durham, N.C.), 129-55 .
- Chantraine(1986): P.Chantraine, *Grammaire homerique, tome ii, Syntaxe* (Paris).
- Coleridge(1938): E.P.Coleridge (tr.), 'The *Suppliants*', in W.J.Oates and E.O'Neill, Jr., *The Complete Greek Drama* (New York).
- Collard(1975) : C.Collard, *Euripides: Supplices* (Groningen).
- Craig(1994) : L.H.Craig, *The War Lover : A Study of Plato's Republic* (Toronto).
- Diggle(1981): J.Diggle, *Euripidis Fabulae, tom.II* (Oxford 1981).
- Ferrari(2007) : G.R.F.Ferrari, 'The three-part soul', in G.R.F.Ferrari (ed.), *Cambridge Companion to Plato's Republic* (Cambridge), 165-201.
- Gregoire(1923) : H.Gregoire and L.Parmentier (tr.), *Euripide : Tragedies tome III* (Paris).
- Jones(1958) : F.W.Jones (tr.), 'The *Suppliant Women*' in D.Grene and R.Lattimore (eds.), *Euripides IV Four Tragedies* (Chicago), 51-104.
- Kitto(1961) : H.D.F.Kitto, *Greek Tragedy : A Literary Study* (London).
- Kovacs(1998) : D.Kovacs (ed., tr.), *Euripides III* (Cambridge, MA.).
- Loraux(1986) : N.Loraux, *The Invention of Athens: The Funeral Oration in the Classical City* (Cambridge, MA.) (originally French)
- Loraux(1998): N.Loraux, *Mothers in Mourning* (Ithaca) (originally French)
- Monro(1986): D.B.Monro, *A Grammar of the Homeric Dialect* (Hildesheim)
- Scully(1996): S.Scully, 'Orchestra and stage and Euripides' *Suppliant Women*', *Arion* 4, 61-84.
- Toher(2001): M.Toher, 'Euripides' *Supplices* and the social function of funeral ritual', *Hermes* 129, 332-43.
- Vernant(1991): J.-P.Vernant, *Mortals and Immortals* (Princeton) (originally French)
- Warren & Scylly(1995): R.Warren and S.Scully (tr.), *Euripides: Suppliant Women* (New York).

- Way(1912): A.S.Way (ed., tr.), *Euripides IV* (Harvard).
- Whitehorne(1986): J.E.G.Whitehorne, 'The dead as spectacle in Euripides 'Bacchae' and 'Supplikes', *Hermes* 114, 59-72.
- Yoshitake(forthcoming): S.Yoshitake, 'Arete and achievements of the war dead: the logic of praise in the Athenian funeral oration', in D.Pritchard (ed.), *War, Culture and Democracy in Classical Athens* (Cambridge).
- 橋本(1991): 橋本隆夫, 「ヒケティデス—嘆願する女たち—」, 『ギリシア悲劇全集 6』(東京, 岩波書店)
- 中山(1965): 中山恒夫, 「救いを求める女たち」, 『エウリピデス』(東京, 筑摩書房), 163-89.
- 吉武(2002): 吉武純夫, 「カロス・タナトスとは何か(上)」, 『ギリシア悲劇における死の受容についての研究』(科学研究費研究成果報告書), 1-32.
- 吉武(2007): 吉武純夫, 「カロス・タナトスとは何か: Tyrtaios の戦死論」, 『名古屋大学文学部研究論集, 文学』 53, 87-109.

#### 注

<sup>1</sup> 中務先生が京大助教に赴任なされたころ, 引越しをお手伝いした折にお礼としていただいたのが, 当時出たばかりの Diggle によるエウリピデスの新しい校訂本であった。以来私のエウリピデス研究はいつもこの本と共にある。先生からいただいた無数の恩恵のひとつである。

<sup>2</sup> この論文では, 形容詞 *kalos* を示そうとする場合には, 基本的には男性主格形で「カロス」と記す。ただし, *kalon theāma* というフレーズは, この箇所を除き, 中性主格形を用いて, 「カロン・テアマ」と記す。

<sup>3</sup> *theāma* はここで観物と訳したが, 「光景」「ながめ」と訳すこともできる。原意は「見えるもの」のことである。

<sup>4</sup> Vernant(1991), 63, n24.

<sup>5</sup> 将たちの遺体は, たとえテセウスらが傷を洗って手当てはしてあるとしても, 何日間もの野晒しゆえの損傷も手伝って直視しがたいものだという事は自明だろう。812, 945 では, 依然として血だらけとされている。

<sup>6</sup> カロスは, 視覚的な様を表す場合であっても, いつも視覚上のこちよさを表すわけではない。たとえば, ホメロスにおいてアキレウスやアレスがカロスだということは, 武人としての卓越性を示すような外見を表しているものと考えられる。cf. 吉武(2007)95-98; Vernant(1991)66-67.

<sup>7</sup> Pl.*Phdr.*250d-e, *Symp.*210a-212c. ここでいうエロスとは, 愛着, 憧れ, 称賛の念, あるいは畏敬の念の強力なものとも説明することができる。

<sup>8</sup> Pl.*Phdr.*245b, 249de.

<sup>9</sup> *pikron*(783)が形容している語句は *eisidein* であって, *theāma* を形容している語句は *kālon* のみである。

<sup>10</sup> ホメロスにおける場合については, Autenrieth s.v.を見よ。古典期における実態については, Pl.*Hp.*Ma.290c-293c に語られている通り。

<sup>11</sup> LSJ 辞書は, カロスが本質的に与格語を要求するようなケースを認めていない。もちろん,

*kālos* が「～に相応しい、似つかわしい」という関係性を表すのではない場合にも、いわゆる「利害の与格」、「倫理的与格」を付されることはあるが、それは別の問題として考えるべきである。LSJ s.v. A.II.1, III.1 の 2 例はそのようなケースである。

<sup>12</sup> 782-83 における句読点の振り方が何通りかあるが、*Diggles* のテキストにおいては *theāma* は、*opsomai* の目的語となっているので、「目に見えるもの」と解するのが構文解釈としては自然だと思われる。

<sup>13</sup> カロン・テアマという言い回しを使った同時代のテキストを見回してみると、「見られる対象」という意で使われるのが一般的であったと思われる。e.g. *Isoc. Paneg.* 45.2 ; *Ar. Av.* 1716; X. *Oec.* 8.20.5; X. *Cyr.* 6.4.11.4.

<sup>14</sup> カロス・タナトスという句の厳密な意味については、吉武（2002）および吉武（2007）を参照せよ。

<sup>15</sup> *Gregoire* の *beau* という訳語は、「美しい」という意味や「立派な」という意味も具えており、カロスと非常に近い意味幅をもつ語であって、原語の意味を余すところなく表しているともいえる。しかし、かえってどういう意味で捉えているのかははっきり説明していないという面もある。この点については、*Scully* (1996) 75 の *a bitter, beautiful sight* という訳についても同様である。

<sup>16</sup> 強いてあげれば、腐った果実を克明に描いた静物画のありさまを思い浮かべるとよいだろう。

<sup>17</sup> *Whitehorne* (1986), 68 や *Scully* (1996), 75 は総勢 40 人を超える壮大なスペクタクルが繰り広げられたという。規模的な大きさも勿論、カロスさの重要な要因でありうるが、その他にどんな要因がありえたかも考えなくてはならない。

<sup>18</sup> 嫌悪の気持ち働いた、ということは、①単に相手が単に死人であるからか、②相手が罪人の死体であるからか、あるいは③相手が腐敗などで物理的に嫌悪感を催す状態にあるからか、のどれかによるものだったと考えられる。*Leontios* の見た死体は、死後どれだけ腐敗しているのかわかる術はないが、*Ferrari* (2007), 180 も想定しているように、③がもっとも自然であるように思われる。*Allen* (2000), 136, n5 は、処刑後間もないときであったと言うが、その根拠は示されていない。

<sup>19</sup> *Aristoteles, Po.* 1448b10-12 は、死体を見ることは、もっとも下等な動物 (*afimotaton thērion*) を見ることと同様に苦痛を伴う (*hyperōs*) ことだと言っている。*Craig* (1994), 101 も、*Leontios* の好奇心を、醜怪なものに挽きつけられる心情に例えられるとして、*Leontios* の見た死体の物理的な醜さを意識している。

<sup>20</sup> 遺体返還を求めて拒否され、テセウスへの嘆願を決意するまでの時間、母たちが嘆願のためにアルゴスからエレウシスまで (直線距離でも 100km 弱) 旅した時間、エレウシスで嘆願していた時間、テセウスの軍のデーバイ遠征 (往復約 100km) が要した時間を考え合わせなくてはならない。

<sup>21</sup> 『国家』のこの一節の研究者たちは、これが欲望と理性の相克を論じた箇所であるからか、ここでカロスという語が用いられていることの違和感には殆ど関心を向けていない。しかし、*Leontios* が、我が意に従わない厄介者に見立てた自分の目に向かって、悪態としての言葉を吐くというこのことは演劇性がある、というのは *Ferrari* (2007), 181 も指摘している通りである。

<sup>22</sup> *Leontios* のエピソードはまさにエウリピデスのこのフレーズを踏まえたものかもしれない。

そうでなくとも、何らかの慣用法がここでは皮肉的に使われているのではないか。

<sup>23</sup> 第四エペインソディオンの始まり—それは第一コンモスの始まりでもあるが—の部分には、運び込まれた遺体がどこに置かれるかを示す文言はないが、遺体はその時点でオルケストラではなくスクーネー上に置かれるのでなくてはならない。なぜならば、941-44 が、それまでコロスが遺体を間近に見ることのできないようにされていたということを示すからである。cf. *Scully* (1996) 68, 69, 75.

<sup>24</sup> 彼女たちはパロドスの終わりでも死欲求を吐露していたが、それは「死んでこの苦悩を忘れたい」(85-87) というものであり、息子たちへの愛惜とは直接かかわりのない形のものであった。

<sup>25</sup> 彼は、実は既に 769 においても一度、死欲求を口にしていたが、それは、テセウスが将たちの遺体を手ずから洗い世話を焼いた、という報告を受けた時のことであった。すなわち、まだ遺体を目にする前だが、やはり遺体の様を生々しく思い浮かべた時のことであったと言える。

<sup>26</sup> *Eudne* は、悲しみのゆえに命を絶つだけではなく、火葬の薪に投身することによって遺体と「一緒に死ぬ」ことをめざしている (1007, 1063)。生々しい遺体の存在が、投身自殺の契機になって

いるのである。

<sup>27</sup> 言葉の上で死を望むということは、勿論本意としてではなくただ修辭的に語っているという場合もありうる。しかし、Eudneのエピソードは、悲痛が本当に死へと繋がることもあるということを示す役割を果たしている。

<sup>28</sup> Toher(2001), 338 は、アドラストスが、嘆きに浸ることによって女性の領域に立つ者となったが、葬礼演説を語ることによって王としての立場に戻るのだと指摘している。

<sup>29</sup> Thuc.2.34 を見よ。cf.Loraux(1986), 264-87; Loraux(1998), 37.

<sup>30</sup> たとえば、「戦死した若者には、どんなに凄惨な光景があったとしても、違和感はなく、いつかわしいのだ」、あるいは「たとえ死んでしまったとしても、彼(若者)には、そういう光景(戦死して横たわっているすがた)はあっていいことなのだ」という意味になってしまうであろう。若者はどんなに凄惨な戦死の仕方をしてよいのだ、戦死するのは若者であるべきだ、という趣旨をプリアモスがここで語るということは想像しにくい。cf.吉武(2002),18-29.

<sup>31</sup> Monro(1891), §143; Chantraine(1986), 73.

<sup>32</sup> Vernant(1991), 84 は、*kala* を「美しい」(*beau, beautiful*)と解したうえで、すべてが「美しい」のはなぜかと自問し、それは「血にまみれた死が現像液のように、勇敢な戦死のすぐれた性質を明らかに映し出し、そのすぐれた性質がそれ自体の美の中に輝くからだ」と述べている。これは、「カロス・タナトス」の本質をつく説明ではあるが、22.73 における「美しい」ものとは、結局、「血にまみれた戦死のありさま」なのか、「死んだ戦士の勇敢さ」なのか、判定できずにいるという事実をも垣間見せている。

<sup>33</sup> cf.吉武(2007), 87-103.

<sup>34</sup> 844 の *eidon* は、一人称単数形と解する立場と三人称複数形とする立場とがあるが、私達にとっては、どちらであっても大差はない。

<sup>35</sup> Pl.*Laches* において勇氣と大胆さの違いが争点のひとつになっているということは、一般にはその二つが同一のものと見做されていたという事情があることを示している。

<sup>36</sup> 「それぞれの戦死者について、真に当人の手柄であることもそうでないことも引き合いにだし、それを言葉尽くしてこの上もなく美しく飾りたて…」(Pl.*Mc.*234c-235a, 戸塚七郎訳)。そのほかにも、アテナイの葬礼演説においては、戦死者全員がアレテーを示したとか、戦績が戦死者だけに帰せられるなど、現場での正確な観察に基づかない贅辞が珍しくないことについては、Yoshitake(forthcoming)を見よ。

<sup>37</sup> ここにはまた、テーバイとアルゴスのどの将とどの将が対戦するかという点を強調した使者の語り(375 以下)を描いたアイスキュロス『テーバイ攻めの七将』に対する、エウリピデスの対抗心もあるかもしれない。

<sup>38</sup> 戦死者はその政治的正当性によってでなく、アレテーを発揮したことによって称えられるというのが、アテナイの葬礼演説における定石であった。Yoshitake(forthcoming)。cf.Dem.60.19.

<sup>39</sup> Kitto(1939), 224; 橋本(1991), 413-14 など。

<sup>40</sup> Burian(1985), 142; Warren & Scully(1995), 10.

<sup>41</sup> Warren & Scully(1995), 18.

<sup>42</sup> Burian(1985), 154.